

同和問題・人権問題啓発標語、

作文の入選作を決定



作文の部

〔特選〕

「明るい社会に」

岩美南小六年 田中 純也

岩美町では毎年、同和問題をはじめとするあらゆる差別の解決を図るための啓発活動の一環として毎年、同和問題・人権問題啓発標語及び作文を募集しています。作文の部で10点、標語の部で742点の応募があり、選考会の結果、次の作文10点、標語104点の入選作を決定しました。差別やいじめなど、日常生活や学校の中で考えるきっかけとなればと思います。なお、作文・標語作品集を各学校、中央公民館等にも配布しますので機会のおり是非ご覧ください。

ぼくが、この文章を書こうと思ったときは、難しいことを考えていて、なかなか書き始められなかった。

でも、「ともに生きる学習」で、差別などについて考えるということがきっかけとなり、思いついた。ぼくは、難しいことよりも、もっと身近なことから探そうと思い、注意しながら一日学校生活を送ってみた。するといろいろなことに気づいた。

まず、暴言、そして、差別やいじめなどさまざまあることに気づいた。友達に、平気で暴力をふるったり、暴言をはいたり一日に何人もの人が、何回もそういう間違いをおかしていることも分かった。そして、自分もそういったことをしてしまっただけかと思ひ、後悔もした。

帰宅して、これらのことを深く考えてみた。まず疑問に思ったことは、そういう暴力や暴言をしたり言ったりしているのを見ていながら、なぜだれもその間違いに気づかないのか。あるいは、なぜ気づいていても注意せず、見てみぬふりをするのだろうかと思った。単純に、注意するのがこわい、注意しても

聞かないだろうという気持ちもあるのかも知れない。だが、ぼくはそれだけではないと思う。初めのうちは、そういう気持ちで注意しなかったかも知れないが、その積み重ねでそういった暴力や暴言などの間違いがあることが「当たり前」になってしまったのかも知れない。

これらのことを何とかするための改善策はないのか。そこで、ぼくは考えた。まず、先に述べたように、身近なことから自分出来ることをやってみようと思う。つまり、まず自分が直さなくてはいけないということだ。

次に何をすればよいのか。その時ふと、差別に関するイベントなどが開かれているということを知ったことを思い出した。さすがにイベントを開くのは難しいので、簡単な呼びかけをすればよいのではないかと思つた。

そして、間違つたことをしている人を見たときに注意すれば、もっと良くなつていくはずだ。勇気を出して注意することが大切だと思う。これらのことを実行すれば、今よりもよいクラスになつて、学校生活がもっと楽しくなるはずだ。

結果的に、暴力、暴言、いじめや差別をしてもよいことは一つもない。いやな思いが残るだけだ。

〔特選〕

「すてきななまえを、ありがとう」

岩美西小一年 三品 至央

ママへ。

わたしは、なまえのペンキようをしたよ。わたしのなまえは、たくさんのひととなかよくなつて、みんなのまんなかで、しあわせになつてほしいというねがいのでつけられたと、ペンキようしました。わたしは、ぜんぜんそのことをしりませんでした。